

つた、法華經の中心思想とは言い難い内容の記述が目立つ。下巻第二十九縁の引用は、法華經教理の一特色をなす成佛思想を示す部分ではあるが、それを引用する縁自體は、やはり冥罰の説話である。かくの如く『日本靈異記』に見られる法華經は、それを輕んずると惡報を得る經典としての性格を強く有つてゐる。これは、日本古來の御靈信仰などとの共通性も考へられるところの信仰であると言ひ得る。

『靈異記』における法華經信仰の特色として、その他に、法華經を公寫すことの強調、觀者信仰等々が上げられるが、いづれにしても現世利益的信仰の文脈で考へられるものであると言はねばならない。即ち、公現報善惡の強調である。それによる信仰のすすめこそ『靈異記』の作者景戒の目的であつたと考へられるから、これは當然ではあるが、とは言へ、景戒自身には、多少はそれを超える法華經信仰があつたことは、各卷序文や、下巻第三十八縁などから知られるところである。

『上野郷主等御返事』の真筆と系年について

寺尾英智

『上野郷主等御返事』は、日蓮聖人真筆の伝來が明らかではなく、『録内御書』をはじめ各種の『録外御書』にも収録されず、個別写本の存在も知られてはいない遺文である。『昭和定本日蓮聖人遺文』所収の同遺文の脚注には「【真蹟】形木1紙完高知要法寺藏（新加）」（一六二二頁）とあり、『定本遺文』に『上野郷主等御返事』を収録するに当たっては形木によつてゐる。ここからいう形木は、板木の意ではなく、日蓮聖人真筆を板木に模刻して紙に摺写したものである。形木は、版本とは異なり、真筆の書体、書風などを模した「真筆の写し」であつて、『上野郷主等御返事』のように真筆が伝わらない場合、真筆を窺い知る資料として文献的価値大なるものがあると考へられる。しかしながら、形木そのものについては、ほとんど言及されたことがないようである。そこで本発表では、『上野郷主等御返事』の形

木を取り上げ、真筆遺文の文献学的研究の一環として若干の検討を加えたい。

『上野郷主等御返事』の形木は、『定本遺文』の脚注に記された高知市要法寺所蔵のものが知られている。さらに千葉県夷隅郡夷隅町大竹家所蔵の一点の伝存を確認することが出来た。この二点の形木について検討を進めることとした。

まず、形木の本紙の袖に押された「身延蔵」の朱印等を手掛かりに身延山の宝物目録を検討した結果、形木の元となった真筆が身延山に伝わっていたことを明らかにした。すなわち、『上野郷主等御返事』は「真蹟身延曾存」遺文の一つであった。このことによつて、『上野郷主等御返事』の文献的信頼性が大いに高まったといえよう。

つぎに、『上野郷主等御返事』は『定本遺文』では弘安二年に系年されていたが、形木に見られる花押、署名の書風の特徴から、弘安五年に系年されることを述べた。

ところで、『上野郷主等御返事』の真筆が身延山に伝わったものであったことから、形木の板行は身延山で行われたものと思われる。身延山参詣の折り、恐らくは久

遠寺において形木が参詣の僧俗に授与されたのであらう。日蓮聖人の真筆は、僧侶といえども容易には拝見することは出来なかつたから、真筆をそのまま写した形木は大変な感激をもって持ち帰られたことであらう。形木が寺院ばかりではなく、一般の信徒の家に伝わったのは、このような理由によると考えられよう。大竹家には、江戸時代の身延山参詣を思わせる資料も伝わっているからである。なお、このような真筆の形木が、『上野郷主等御返事』以外にどの程度板行されているかは、今後の調査に俟ちたい。(『御遺文研究』二〇号に要旨を發表したので参照されたい。)

『池上永寿院開基戸川達安一門の研究と不受不施事件』

内 藤 潮 洲

日蓮宗七百年の歴史は流罪の歴史である。しかし又、これありし故に宗祖の本尊、開目抄相出現したのであつた。